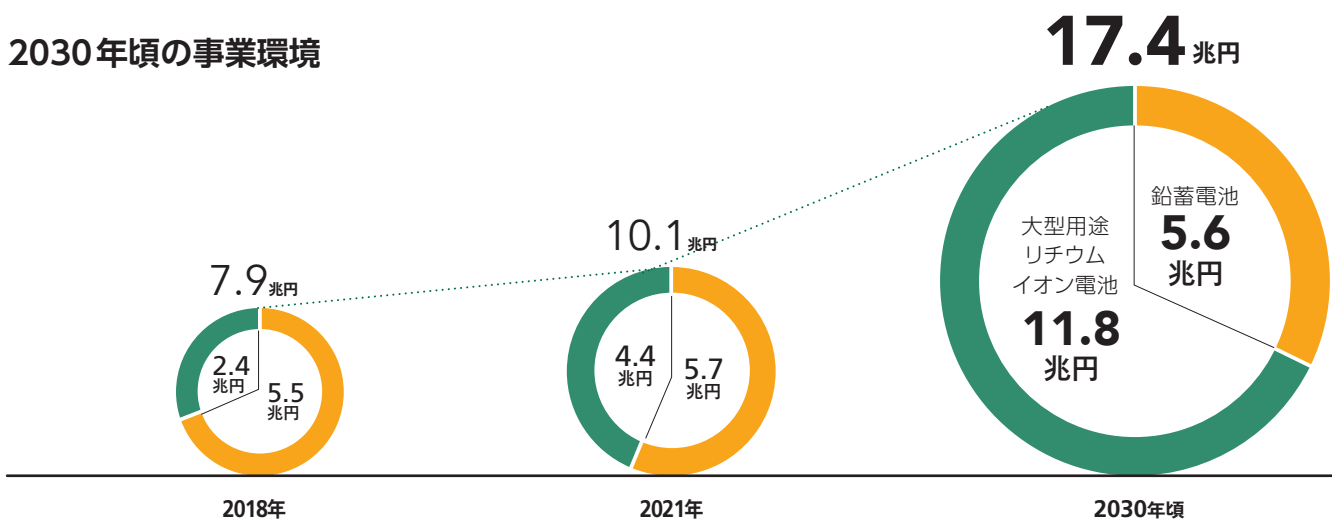


エネルギー・デバイスへの期待に応える

当社グループは、環境変化を機会として成長し続けるために、2030年頃の事業環境を見通して長期ビジョンと第五次中期経営計画を策定しています。将来にわたって必要とされる、価値あるエネルギー・デバイスを創造し続けていきます。

2030年頃の事業環境



出典: 富士経済「エネルギー・大型二次電池・材料の将来展望2018-エネルギーデバイス編」(一部推定)

大型用途リチウムイオン電池は 2030年代に向かって需要が大きく伸長

大型用途リチウムイオン電池の需要は2030年代に向かって次世代環境自動車分野を中心に大きく伸長する見込みです。

自動車産業は「CASE※1」という、100年に一度といわれる大変革期を迎えています。また社会の持続可能な開発目標(SDGs)への取り組みは加速され、社会全体の環境負荷低減に向けて欧米では企業別平均燃費基準(CAFE※2)の導入が進んでいます。各メーカーはCO₂排出抑制のために環境対応車の開発・販売を強化しています。

※1 Connected(コネクティッド化)、Autonomous(自動運転化)、Shared/Service(シェア/サービス化)、Electric(電動化)の4つの頭文字をとったもの

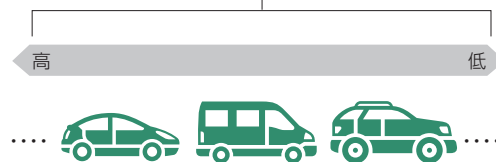
※2 Corporate Average Fuel Efficiencyの略称

CAFE規制の概要

自動車メーカー

販売する全車種の平均燃費に対して規制値が設定されるため低燃費車の販売拡大が必須に

燃費性能



鉛蓄電池は 一定の需要が継続

鉛蓄電池の需要は、グローバルで増加するものの微増にとどまると予想されています。

長年の実績から信頼性が高く低コストで生産できる鉛蓄電池は、新興国を中心に増加する自動車の始動用、補機用電池の主流とみられています。その他産業用途でも、フォークリフトや通信用無線基地局、無停電電源装置などに需要が見込まれています。

鉛蓄電池の用途例

